

〈中〉のロゴスへ

私の現在のテーマは、〈中〉のロゴス。〈中〉と〈あいだ〉は、類義語であるものの同義ではない。〈あいだ〉とは異なる〈中〉ならではの意味を、なぜいま考える必要があるのか、を明らかにする。

I 〈あいだ〉と〈中〉

○ 〈あいだ〉の二義性——④「^{アヒド}合処」＝〈出会い〉の場、⑤《*between A and B*》＝二者の中間。二者を分ける二元論では、分断された二者の中間＝⑤が問題にされず、出会うための〈あいだ〉＝④は、閉ざされている。風土学は、二元論の閉ざした〈あいだ〉を開くことをモットーとする。

○ 「中の論理」の意義と限界：

山内得立は、二元論的なロゴスの論理が扱わなかった〈中〉の意義を規定する「中の論理」（レンマの論理）を提起した。→①

しかし「中の論理」は、二者を分ける二元論を認め、そのうえで中間に注目することから、ロゴス的な思考に制約されている。「二者の中間」とは異なる〈中〉そのものを考える必要があるのではないか。

II もう一つの〈中〉へ

○ 〈中〉は、それ自体で「正しさ」を意味する——ex. 「中正」「中道」。

「中道」とは、「道に中^ちたる」こと。過不及のないあり方を善しとする「中庸」の思想は、洋の東西に存在する。→②③

○ 二分法（二元論）が主流である哲学（*philosophy*）には、分けることのできない〈中〉自体を表す論理（ロジック）は存在しない。

→ 「論理」では表現されない〈中〉の〈意味〉（ロゴス）を考えなければならない。→④

[資料]

① 「中」の論理

「中とはただ二つのものの中にあることをではなく、それが二つのものの孰れでもなく、そしてそれ故にそれらの孰れでもあり得ることを意味する」(山内得立『新しい道德の問題点』理想社、1958年、73-4頁)。

② 「中庸」の根本的意義

「喜怒哀樂の未だ発せざる、これを中と謂う。発して皆な節に中る、これを和と謂う。中なるものは天下の大本なり。和なる者は天下の達道なり。中和を致して、天地位し、万物育す」(喜・怒・哀・樂などの感情が動き出す前の平静な状態、それを中という。[それは偏りも過不及もなく中正だからである。]感情は動き出したが、それらがみな然るべき節度にびたりとかなっている状態、それを和という。[感情の乱れがなく、正常な調和を得ているからである。]こうした中こそは世界じゅうの[万事万物の]偉大な根本であり、こうした和こそは世界じゅういつでもどこでも通用する道である。中と和とを実行しておしきわめれば、人間世界だけでなく、天地宇宙のあり方も正しい状態に落ちつき、あらゆるものが健全な生育を遂げることになるのだ。) (『中庸』第一章二節、『大学・中庸』金谷 治訳注、岩波文庫、1998年、144-5頁)。

③ 中間性としての徳

「感情と行為において然るべき事柄に関して、前者[超過による悪徳]は超過し後者[不足による悪徳]は不足するが、徳はその中間を発見し、これを選び取るのである。したがって、その本来のあり方、つまりそれがそもそも何であったかという定義に基づけば、徳は中間性[中庸]であるが、最善であり「よく」あるという点に基づけば「頂点」である」(アリストテレス『ニコマコス倫理学』神崎 繁訳、[全集 15] 岩波書店、2014年、81頁)。

④ 「中道」の要請

「敵対する二つの立場が衝突する世界の現実……ここで、二つの勢力の〈あいだ〉に立つ、とはどういうことだろうか。筆者が追究してきたこのスローガンだけでは、問題の解決は望むべくもない。Aと非Aのどちらでもなく、どちらでもあるような「中間」、というだけでは、何ら事態の根本的解決につながらないことは明らかである。ここで考えるべきは、最初から二元対立に立たない「中」の思想があるとした場合、それに従うことによって対立を生み出さないような「中道」の立場ではないだろうか」(木岡伸夫「「中の論理」再考」『関西大学 文学論集』第七十三巻 第一・二合併号、2023年9月、53頁)。

【概要】

《風土学のいま》シリーズの2回目。現在の研究テーマ「中のロゴス」を説明する。周知の「中の論理」(山内得立)ではない、〈もう一つの中〉、〈中〉そのものの意味を考えなければならぬ、というのが今回の趣旨。

I 〈あいだ〉と〈中〉

- 〈あいだ〉の二義性
- 「中の論理」の意義と限界

『あいだを開く』(2014年)では、ここで区別される二つの意味を同じであると見たが、aとbの意味は同じではない。「二つのものの中間」はb。これが、同時にaでもあることに着目した。この発見に導いたのは、山内得立の「レンマの論理」(中の論理)——①。しかし、山内が暗に認めている「ロゴス的な論理」(二元論)では不十分、「二者の中間」とは異なる〈中〉そのものを考える必要があるのではないかと考え直した結果が、昨年発表した論文2篇(HP参照)。本日記布の一篇は、それらの続篇である。

II もう一つの〈中〉へ

- 〈中〉は、それ自体で「正しさ」を意味する——ex. 「中正」「中道」。
- 二分法(二元論)が主流である哲学(philosophy)には、分けることのできない〈中〉そのものを表す論理(ロジック)は存在しない。

〈中〉そのものが〈正しさ〉とイコールであるとする思想は、古来、中国では有力だが(→②)、西洋哲学の伝統にはあまり見当たらない——アリストテレスの「中庸」は例外(→③)。対立する二つの勢力が、敵対する相手を殲滅しようとしてせめぎ合う現状は、「もう一つの中」(正しさそのもの)を実現することを要求する。→④

【課題】

- ・ 〈中〉のロゴス(=意味、「ロジック」ではない)を、どのように具体化するか。
- ・ 〈中〉の二つの意味——〈中間〉(あいだ)と〈正しさ〉——とを、いかに結びつけるか。

この二点をめぐる模索を、後期の「哲学講話」でお見せしたい。